

りんごの秘密

県立広島大学
ひろしま美術館
連携公開講座

日時 平成20年5月10日・17日・24日・31日(土)
13:30~16:00(初日のみ16:10まで)

会場 県立広島大学 広島キャンパス (広島市南区宇品東1-1-71)

5月10日 (土)	13:30~13:40	講座の紹介	ひろしま美術館学芸員 古谷 可由
	13:40~14:50	りんごの科学	生命環境学部教授 入船 浩平
	15:00~16:10	りんごの暦と物語	地域連携センター助教 田淵 桂子
5月17日 (土)	13:30~14:40	人が林檎を手にした時	人間文化学部准教授 佐伯 恵子
	14:50~16:00	描かれたりんごの物語	ひろしま美術館学芸員 水木 祥子
5月24日 (土)	13:30~14:40	近代文学の「りんご」	人間文化学部教授 坂根 俊英
	14:50~16:00	描かれた「りんご」 ~机の上にりんごが載るまで	ひろしま美術館学芸員 古谷 可由
5月31日 (土)	13:30~14:40	18・19世紀のりんご	人間文化学部教授 天野 みゆき
	14:50~16:00	セザンヌのりんご	ひろしま美術館主任学芸員 渡辺 純子

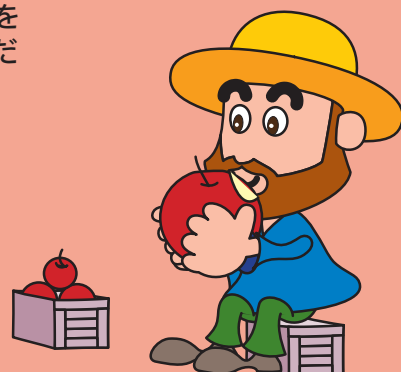
募集対象 どなたでも(原則として4回連続受講できる方) 100名程度

受講料 無料

申し込み 往復はがきの往信面に 氏名、ふりがな、郵便番号、住所、電話番号、返信面の表に受講者の氏名と住所をご記入の上、4月25日(金)までに次の宛先に郵送してください。受講案内は4月下旬にお送りします。(全員受講可、抽選はありません。)

問い合わせ 〒734-8558 広島市南区宇品東1-1-71
県立広島大学地域連携センター「りんご講座」係
電話 082-251-9534/ FAX082-251-9405

主催 公立大学法人県立広島大学 財団法人ひろしま美術館



ひろしま美術館マスコットキャラクター ゴッホくん

申し込みにあたってお寄せいただいた個人情報は県立広島大学公開講座以外の目的には使用しません。

「りんごの秘密」概要

入船浩平「りんごの科学」

私たちに最も身近な果物であるりんご。知っているようで案外知られていないりんご。りんごの生い立ちからその一生を追いかける。どのような品種がどんな目的で改良され生まれてきたか、改良の技法としてのバイオテクノロジーを含めながら栽培の歴史をひもといていく。また、食品としての果実の味や栄養価、りんごはなぜ赤いのか、地球温暖化とりんごなど、生命科学の研究者の立場からりんごの秘密にせまる。

田淵桂子「りんごの暦と物語」

クリスマスのごちそうと言えば七面鳥かチキン。が、かつてはりんごをくわえた豚（イノシシ）の丸焼きだった。また、ドイツを中心に広がったクリスマスツリーにはりんごが飾られていた。10月31日のハロウィーンには、りんごを使った占いがあり、そして、1月の十二夜には、りんごの木に祝杯をあげる風習がある。りんごをめぐる行事と、それに連なる神話や物語の中に、りんごの原初的な姿を見ていく。

佐伯恵子「人が林檎を手にした時」

聖書の中で、林檎はイヴに産みの苦しみを、アダムに労働の苦しみをもたらした。ギリシア神話の中で、パリスがアフロディテに手渡した林檎はトロイア戦争の引き金となった。お伽話の中で、美味しそうな赤い林檎は白雪姫に死をもたらした。林檎は厄災の象徴なのだろうか？人が林檎を手にした時、その林檎は何を意味するのだろうか？主にゴールズワージー『林檎の樹』の一部とシルヴァスタイン『大きな木』を読みながら、林檎と共に描かれる人物に目を向けて、そこに何が見えてくるかを探ってみる。

水木祥子「描かれたりんごの物語」

「アダムとイヴ」や「パリスの審判」など、聖書や神話の中にはりんごにまつわるいくつかの物語が登場し、古来より画家たちはそれらの物語を視覚化してきた。聖書の中には具体的な果物の名前が記されていない「禁断の果実」は、いかにしてりんごのイメージで描かれるようになったのか。そのほか、古代ギリシアから近代にいたるまで多くの画家たちを魅了してきた「パリスの審判」の図像変遷を美術史の流れに沿って見ていく。

坂根俊英「近代文学の『りんご』」

日本近代詩の中で「りんご」という題材を考えれば、島崎藤村の「初恋」という詩や山村暮鳥の「りんご」という詩が想起される。また、宮沢賢治は童話「銀河鉄道の夜」で汽車の中の乗客がりんごを食べている情景を描いているが、「青森挽歌」という詩の方ではりんごの中を走る汽車という逆転したイメージを詠んでいる。それらの詩や作品をとりあげながら、近代文学の中の「りんご」について味読しながら考えてみたい。

古谷可由「描かれた『りんご』～机の上りんごが載るまで」

西洋においてもっとも身近な果物のひとつであった「りんご」は、中世以来さまざまな形で絵の中に描かれてきた。「パリスの審判」などの神話画やアダムとイヴなどの宗教画に見られる「りんご」が代表的なもので、それぞれ「りんご」に「意味」が込められている。しかしそれとは別に、われわれから見ると一見「意味」のない単なる果物のひとつとして描かれた「りんご」も存在する。ここでは、この種の「りんご」に焦点をあて、中世から、近代的な意味で「静物画」と呼ばれて「机の上」に載せられるまでの「りんご」を紹介する。

天野みゆき「18・19世紀のりんご」

17世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパでは宇宙、人間、自然に対する見方が大きく変化した。その時代、作家や画家たちはりんごに何を見出し、何を表現しようとしたのだろうか。スウィフトの『ガリヴァー旅行記』、ラファエル前派の絵画、マーク・トウェインの『アダムとイヴの日記』等を題材として考える。

渡辺純子「セザンヌのりんご」

りんごを描いた画家といえば、まずセザンヌであろう。緑、赤、黄という基本的な色彩によって覆われた球体。セザンヌのりんごは、モチーフとしてりんごの魅力を一挙に引き出し、やがてセザンヌ自身を20世紀美術の最も重要な先駆者の地位に押し上げた。しかし、セザンヌにとってりんごは果たして魅力的なモチーフでしかなかったのだろうか。セザンヌのりんご、そしてセザンヌ以後のりんごを、「モチーフ」「意味」の両面から検証してみたい。